



TITLE:

# 「能力表現」の語用論：日本語とアラビア語の対照研究

AUTHOR(S):

西尾, 哲夫

---

CITATION:

西尾, 哲夫. 「能力表現」の語用論：日本語とアラビア語の対照研究. 言語学研究 1988, 7: 153-184

ISSUE DATE:

1988-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87936>

RIGHT:

「能力表現」の語用論  
——日本語とアラビア語の対照研究——

西尾 哲夫

1. はじめに

本稿の目的は、現代アラビア語 (Modern Literary Arabic) (注1) の「能力表現」について主に語用論的観点から分析し、そこで得られた結果を日本語 (或いは英語) の類似表現と比較した上で、「能力表現」自体の通言語的異同を観察することにある。ここで言う「能力表現」とは、概略、英語の可能表現の助動詞 'can' の基本的用法である「可能性の 'can' 」と「能力の 'can' 」に相当する表現のうち、特に後者、つまり主語或いは作為者 (動作主) の能力が問題の事象の実現可能性に関連することを表現する形式を指すものとする。

- a. Japanese can't be difficult to master. (「可能性」の 'can')
- b. John can speak Japanese. (「能力」の 'can')

以下の議論では、まずアラビア語の「能力表現」形式、istaṭā'a の統語的、意味的特性を、他のモダリティを表わす形式 (特に「可能性」を表わす yumkinu) との比較から明らかにし、その使用状況や文脈との関連で同形式の生起が、いかなる語用論的契機によるものなのかについて、特に会話の含意という点から考察し、その結果を日本語の「能力表現 (可能形 -eru, -areru, -dekiru を含む表現)」と比較検討する。

2. アラビア語の「能力表現」

2. 1 統語的特性

現代アラビア語のモーダル形式は、動詞に分類されるものと、辞詞に分類されるものがある。前者には次の4種類がある (注2)。

- ① yajibu: "must, have to"
- ② yanbaghii: "have to"
- ③ yumkinu: "it is possible for"
- ④ yastaṭī'u: "can/be able to"

これらの動詞的モーダル形式は、以下の点において他の普通の動詞と同じ特性を持っており、少なくともそれらの点で動詞に分類することが可能である。

- i) 未完了形があること。
- ii) 否定辞 laa で否定できること。
- iii) 疑問詞 hal で疑問文が作れること。

しかしながら、動詞的モーダル形式には次のような他の動詞には見られない諸特性がある。

iv) 完了形がないこと。

アラビア語の動詞は完了形と未完了形の二形式を持つが(例、naama “he slept, yanaamu “he sleeps”), yastaṭīi‘u を除いて未完了形しかない。

v) 人称による活用形式がないこと。

アラビア語の動詞は、主語の人称(一人称、二人称、三人称)と数(単数、双数、複数)と性(男性、女性)に呼応して活用するが、yastaṭīi9u をのぞいて活用せず、常に三人称単数男性形(未完了)である。

例.    'aktubu “I write”        'ana yajibu        “I must”  
         naktubu “we write”    naḥnu yajibu        “we must”  
         yaktubu “he writes”    huwa yajibu        “he must”

vi) 接続形(Subjunctive)がなく、'an “in order to”、li- “in order to” 等に後接できない。

例.    'an yaktuba “in order for him to write”        \*'an yajiba

vii) 他のモーダル形式と共起できないこと。

例.    \*yajibu 'an yumkina

viii) 'an の標識による補文をとること。

ix) 過去の否定辞lam、未来の否定辞lanと共起しないこと。

例.    lam yaktub        “he didn’t write”  
         lan yaktuba        “he will not write”  
         \*lam yajib  
         \*lan yajiba

x) 命令形がないこと。

以上のような動詞との類似点と相違点について、「可能性」を表わすyumkinuは全てを満たすが、「能力」を表わすistaṭāa‘a/yastaṭīi‘uは、①完了形を持つこと(cf. iv)、②人称による活用形式を持つこと(cf. v)、③lamとlanによって否定できること(cf. ix)の三つの点で他の動詞的モーダル形式と異なっている。しかしながら、他の特性については満たしており、それらの点で普通の動詞とは区別される。

cf. vi) \*'uriidu 'an 'astaṭīi‘a “I want to ---”

vii) \*yumkinu 'an yastaṭīi‘a  
         \*yastaṭīi‘u 'an yumkina

viii) 'astaṭīi‘u 'an 'a‘kula “I can eat”

x) 命令形なし。

現代アラビア語には動詞的モード形式以外に、辞詞的モード形式として、labudda “it is necessarily the case that”、rubbamaa “it is possible that”、la‘alla “同”、qad “it is certain or possible that”、‘ala “it is incumbent on” がある（注3）。これらの諸形式は、他の普通の辞詞に比べて、動詞（的モード）的特性を持っており、これらの形式をも含めて現代アラビア語のモード形式を分類するならば、完了、未完了、人称等の形態的特性から大きく次の四種類に分類できる。

①完了形と未完了形を持つ動詞的モード形式

istaṭaa‘a/yastaṭii‘u

②未完了形だけの動詞的モード形式

yajib, yumkinu, yanbaghii

③対格の主語（或いは人称代名詞）をとることで呼応する辞詞的モード形式

‘ala, la‘alla

④主語との呼応のない辞詞的モード形式

labudda, qad, rubbamaa

①の形式が最も動詞的であり、②、③、④の順序で辞詞的（或いは助動詞的）特性が強くなっており、少なくとも現代アラビア語のモード形式には、英語の法助動詞に比べて、一つのクラスを想定すべき統語的根拠に乏しいことがわかる。このことは、これらのモード形式の統語環境をみると、より明白になる。補文にくる動詞との関係から、モード形式は次の三種類に分類できる。

(a)モード形式+動詞

(b)モード形式+‘an+動詞

(c)モード形式+‘ala+動詞

rubbamaa, qad, la‘allaは(a)に、yumkinu, labudda, ‘alaは(b)に、yajibu, yanbaghiiは(b)または(c)に各々属している。istaṭaa‘aは、基本的には(b)の統語パターンをとるが、動名詞を目的語にとる点で他のモード形式より動詞に近いと言える（注4）。

例.    ‘astaṭii‘u ‘an ‘asma‘a                    “I can hear”  
          ‘astaṭii‘u al-sam‘a（動名詞）            “I can hear”

## 2. 2 意味的特性

以上のような観察から、「能力表現」のモード形式であるistaṭaa‘aは、モード形式の中で、最も動詞的特性の強い形式であるとわかったが、同時に幾つかの点で本来の動詞とは異なることもわかった。以下では、その意味的特性について、他の「可能（性）表現」形式（特にrubbamaaとyumkinu）と比較しながら、明らか

にしたい。

先ずrubbamaaについては、‘epistemic’な意味の弱い「可能性(possibility)」を表現する形式であると規定できる(cf. 英語の‘may’)。例えば、次の例文の場合、発話者に「ザイドが行く」ことに関する確定的根拠はないが、同時にそれが起こることを妨げるような状況も(発話者の知る限りでは)存在しないことを表わしている。

(1) rubbamaa yadhhabu Zayd-un

Impf-go Zayd-Sub

‘Zayd may go’

rubbamaaには、‘sometimes’の意味を持つ用例も見られるが、これは次例のように文脈(或いは語用論的状況)によるものと考えられる。

(2) rubbamaa ‘al‘abu, wa rubbamaa ‘adrusu

Impf-play-I(=Sub) and Impf-study-I(=Sub)

‘I sometimes play, and sometimes study’

この文は、例えば次の(3)aの質問に対する返答としては‘sometimes’の意味を持つであろうが、(3)bの質問に対する返答としては、本来の弱い「可能性」の意味を持ち、‘I may play, and I may study’の訳が、妥当である。

(3) a. maa sa-taf‘alu fi al-‘uṭlat-i

what future marker-Impf-do-you(=Sub) in the-holiday-gen

‘What will you do in the holiday?’

b. maa taf‘alu fi al-‘uṭlat-i

‘What do you (usually) do in the holiday?’

次にyumkinuについては、英語の「可能性」の‘can’に近い表現形式であるが、さらに、「経験的」知識(或いはそれに基づく信念)に拠る発話者の判断を示す形式であると規定できる。例えば、コンピューターの専門的技術者は、彼の経験的知識に基づいて、ハードウェアの故障の可能性を指摘(或いは予期)することができるであろうし、天気の変化に通じた町の古老は、明日の天気を予想することができる。rubbamaaは、問題となっている事象の生起に関連する経験(的知識)の欠如(つまり、ある事象の生起が不可能であることを示す知識を発話者が所有していないこと)に基づく判断であるのに対して、yumkinuは、より積極的に、ある事象の生起が可能であることを示す知識(或いはそれに基づく信念)が発話者に所有されていることを前提としている。従って、yumkinuを含んだ文を発話された相手は、その文の示す事象の生起可能性について疑念を持つ場合、次の例に見られるように前提とする発話者の知識を問いたすことができる。

- このような文脈では(4)aの文中にrubbamaaを使うことができない。ここで興味深いのは、(4)cの返答に相当するような表現を明示したyumkinuを含む例が比較的多いことである。

- rubbamaaとyumkinuの意味についても一つ注意すべきことは、後者が発話者の経験的知識に基づく判断であると言っても、前者が全くそのような知識に関与しないということではないということである。次例から観察されるように、yumkinuにおいては経験的知識がより積極的役割を荷なっているが、rubbamaaにおいては消極的役割しか持たないだけのことである。

- (6)に關与する發話者の經驗的知識は、成功が普通は一生懸命さと積極的に結びつけられるという意味で、積極的役割を持っているが、(7)の場合は、全くの幸運（全く何もしないでの）による成功も經驗に照らし合わせて、起こらないことではないという意味で、消極的な役割しか果たしていない。

-157-

(8) yastaṭīi'u 'an yataḥaddatha bi xams lughaat-in  
 Subj-speak with five languages-gen

'He is able to speak five languages'

従って、yastaṭīi'uを含む文においては、作為者の存在が不可欠であり、(9)aのyumkinuを yastaṭīi'uに置き換えることはできない。

(9) a. ḥawaadith al-ṭariiq-i yumkinu 'an tu'addiya 'ila al-mawt-i  
 accidents the-road-gen Subj-lead to the-death-gen  
 'Road accidents can lead to death'

b. \*ḥawaadith al-ṭariiq-i tastaṭīi'u 'an tu'addiya ila al-mawt-i  
 'Road accidents are able to lead to death'

このことは次のような受動文においてより明らかである。

(10) a. yumkinu 'an yuxda'a  
 Subj-Passive-deceive-he(=Sub)

'He can be deceived'

b. \*yastaṭīi'u 'an yuxda'a

従って、yastaṭīi'uを含む文の主語は「能力」を持ち、それを行使する存在ということで、当然多くの場合有生(animate)であることが予想されるが、実際には次例のように無生(inanimate)の作為者(主語)を含む文も見られる。

(11) tastaṭīi'u sayyaarat-i 'an tashiqa al-qīṭaar-a  
 car-my Subj-outrance the-train-acc

'My car is able to outrance the train'

「自動車」は、自律的動作を開始する存在物という意味での'agent'ではないが、「高速で走る」ことが技術的に付与された固有の「能力」と判断される限り、この文のyastaṭīi'uは有意義である。従って、固有の能力(性能)を想定しえない次のような表現でのyastaṭīi'uの使用は、不可能である。

(12) \*tastaṭīi'u sayyaarat-i 'an takuuna jamiilat-an  
 car-my Subj-be beautiful-acc

'My car is able to be beautiful'

### 3. 「能力表現」の語用論

#### 3. 1 従来の研究

モダリティの意味論的研究の大部分は、英語の法助動詞の研究を通してなされてきた。ここでそれら全てを吟味する余裕はないが、主な研究は概略、以下のような特徴で分類できるであろう(注5)。

①基本的意味の分析; Ehrman(1966), Woisetschlaeger(1976), Kratzer(1977)

Tregidgo(1982)

- ②Matrix分析; Twaddell(1960), Joos(1964), Bouma(1975)
- ③Matrix-feature分析; Marino(1973), Ney(1981)
- ④論理的分析; von Wright(1951)
- ⑤パラメーター分析; Acker(1981)
- ⑥単一スケール分析; Diver(1964), Lyons(1977), MacCallum-Bayliss(1984)
- ⑦成層文法分析; Johannesson(1976)
- ⑧遂行的(performative)分析; Boyd & Thorne(1969), Newmeyer(1973)
- ⑨文脈的分析; Palmer(1979, 1980)
- ⑩コーパス分析; Coates(1983)
- ⑪語用論的分析; Lakoff(1972)
- ⑫類型論的分析; Palmer(1986)

PalmerとLakoffの研究を例外として、従来のモダリティ研究は、個々のモーダル形式の「基本的意味」の存在を前提として、その意味を純粋に意味論的見地から同定することであった。個々のモーダル形式の意味が、'discrete'なものであるか、'continuum'を構成するものであるかについて見解の相違はあるが、語用論的考察を欠いたために、あまりにも単純化されたり（例； Bouma, Tregidgo）、逆にあまりにも複雑化されたり（例； Ney, Acker）、分析枠組と実例の分析に矛盾が見られたりする（例； Coates）。モダリティとは、確かに、ある命題の実現可能性（或いは真理値）に関する発話者の判断であると定義できるが、Karttunen(1972, p. 8)の'modal distinction always involves a covert reference to human knowledge and belief'の言葉にあるように、常に発話者を含む発話状況に深く関わらざるをえないのであり、そのような状況に関与的な発話者の「主観性(Subjectivity)」の全ての部分を、文の構成的意味と真理値のみを対象とする（狭い意味での）意味論のみで扱うことは困難であると思われる。純粋な意味論的分析と語用論的分析の混同の好例が、Coatesのコーパスに基づく研究である。ここで彼女の分析を詳述する余裕はないが、Palmerの文脈重視の分析をさらに批判的に推し進め、実例を全て説明するための装置として'Fuzzy set theory'を導入し、個々のモーダル形式の持つ意味上の不確定性(indeterminacy)を'gradience'の概念で説明しようとしたものである。その中でも特に'Root must(=deontic must)'の意味特性に関する次のような記述は(p. 33)、語用論的分析枠組の中で取り扱われるべきであろう（特にiii、iv）。

- i) 主語が有生であること。
- ii) 主動詞が活動動詞(activity verb)であること。
- iii) 発話者が、主語（の人）にその行動をさせることに関心を持っていること。



iv) 発話者が、主語(の人)に対して権威(authority)を有すること。

### 3. 2 分析枠組

単純に言えば、一つの文の意味は、主語・動詞等の各構成要素の語彙的意味の組み合わせとしての構成的意味のレベルと、その再構成された文の意味と実世界の間の指示関係(つまり真理値)に関与する指示的意味のレベルと、発話者がその当該言語の慣習的(conventional)原則に基づいて意図する意味のレベルから成立するものと規定できる。最後のレベルをSearle(1983)の言葉をかりて、「意図的意味(intentional meaning)」と呼ぶことにする。彼の発話行為理論によれば、「意図性(intentionality)」とは発話をする際の発話者の心的状態を指し、信念(belief)、願望(desire)、意図(intention)の基本的要素に分解される。従って、いわゆる「誠実性条件(sincerity condition)」は、発話内行為と結び付けられた心的状況の下位集合と規定できる。例えば、(13)bは、(13)aという発話者の心的状態つまり誠実性条件の外的(言語的)表出と考えられる。

(13)a. 誠実性条件：発話者はドアが開くことを願望している。

b. 依頼：「窓を開けてください」

また、このような発話内行為が実際に行なわれるためには、その準備条件(preparatory condition)としての発話状況に関する条件(発話者のその相手に対する対人関係、その知識(の質と量)に関する信念等)が満たされねばならない。例えば、(14)のようなrubbamaaを含む文が発話された場合、概略(15)のような適切条件(felicity condition)が想定できる。

(14) rubbamaa yarbaḥu zayd-un 'alf-a junayh-in  
Impf-win Zayd-nom(=Sub) a thousand-acc pound-gen  
'Zayd may win one thousand pounds'

(15) (14)の適切条件(の一例)：

準備条件1：ザイドが最高額1000ポンドの宝くじを最近買ったこと。

2：(14)の発話の相手が、ザイドはそのくじに当たらないだろうと信じていること。

誠実性条件：(14)の発話者がザイドがくじに当たらないことを示す必然的根拠がないこと、つまり、当たることが不可能ではないことを信じていること。

本質条件：発話者は相手に、自分の信じていること(cf. 誠実性条件)を知らせること。

すでに前章の意味論的分析で議論したように、rubbamaaとyumkinuの相違の一つは、誠実性条件に関わる部分である。rubbamaaでは、問題の事象の生起が不可能で

あることを示す経験的知識がないことを発話者は信じているのに対して、yumkinuでは、その事象の生起の可能性を示す経験（的知識）があることを信じている。このような誠実性条件の相違は、当然本質条件、つまり特定の発話内行為に本質的な意図性の相違を生み出す。発話者は、協調の原理（cf. Grice 1975, 1978）によって、「不可能性の証拠の不在」という消極的誠実性条件内容から、発話の相手に問題の事象の生起を信頼して予期してもいいとは望まないであろうが、逆に、「可能性の証拠の存在」という積極的誠実性条件内容から、信頼して予期してもらいたいと望むであろう。その意味で(16)aは不適切な文となる。

- (16)a. ?rubbamaa yadhhabu,                      tawaqqa' dhaalika  
    Impf-go-he(=Sub) Impr-expect that  
    'He may go, so expect it!'

- b. yumkinu 'an yadhhaba, tawaqqa' dhaalika  
    'He can go, so expect it!'

従って、yumkinuの誠実性条件が成立しえないような(17)の例文では、rubbamaaをyumkinuに変えると、語用論的理由から不適切な文とならざるをえない。

- (17) rubbamaa taħduthu                      mu'jizat-un  
    Impf-happen miracle-nom(=Sub)  
    'A miracle may happen'

また、次のような相手の（経験的）知識を問うような対話においてrubbamaaを使うことは、その本質条件（つまり、消極的証拠しかない内容を相手に伝えること）と協調の原理から判断して、相手（つまり(18)aの発話者）の期待に応えるものでなくなる。

- (18)a. maa faa'idat-u al-zawaaj-i  
    what benefit-nom the-marriage-gen  
    'What is the benefit of marriage?'  
       b. al-zawaaj-u yumkinu 'an yu'addiya 'ila al-'istiqaar-i  
    the-marriage-nom                      Subj-lead to                      the-stability-gen  
    'Marriage can lead to a stable life'

yumkinuとyastatii'uの語用論的観点からの相違の一つは、yumkinuの本質条件に含まれる、問題の事象の生起に関する信頼性或いは予期性の部分である。yastatii'uの場合は、作為者の「能力」に言及するだけであって、yumkinuのように、相手に問題の事象の生起を信頼させ、予期させる効力を持つものではない。その意味で、yastatii'uを含む文が、「約束」という発話内行為を表わすことはないが、yumkinuの場合には、次例に見られるように表わすことができる。

- b. (wa'd-an 'promise?'; 相手の返答)

以上、特にyumkinuとの比較から、yastaṭii'uの基本的意味について考察してきたが、「経験的可能性」を意味するyumkinuと、「作為者の能力的可能性」を意味するyastaṭii'uの（語用論的）相違として、「作為者の存在」と「陳述の（発話の相手からの）信頼性」という二つの要素が確認された。以下においては、istataa-'a/yastaṭii'uの語用論的特性について、時制・否定・疑問という三つの統語環境との関連から考察したい。

現代アラビア語の動詞体系は、完了形(Perfective)と未完了形(Imperfective)の二つの基本形式を有しており、一般化して言えば、前者は「完了相(perfective)」または「相対的過去テンス(relative past tense)」のどちらかが関与する場合に用いられ、後者は「未完了相(imperfective)」かつ「相対的非過去テンス(relative non-past tense)」の両方が同時に関与する場合のみに用いられる(cf. Comrie 1976 pp.78-81, 1985 pp.63-64)。単文に限れば、過去・現在・未来に関する表現は次のようになる。

- a. kaana+Pf: kaana kataba 'He wrote/had written'
- b. kaana+Impf: kaana yaktubu 'He was writing/used to write'
- c. Perf: kataba 'He wrote/has written'

現在

- d. Impf: yaktubu 'He writes (habit)/is writing'

未來

- e. Impf: yaktubu 'He will write/will be writing'
- f. sa(∼sawfa)+Impf: sa-yaktubu 'He will/is going to write'

まず、dの場合と同様に、b、fの場合についてもyumkinuとの対比から考察してみよう。

- (21)の文は、発話者の経験的知識に基づく過去の事象の可能性を表現したものであり、実際に問題の事象が生じたかどうか、つまり実際に「彼がその部屋に入っ

た」かどうかについては、この文からは判断できない。従って、(21)の次には(22)のa、bどちらの文もくることができる。

(22)a. fa-qad daxala-hu  
'then he did enter it'

b. fa-lam yadxul-hu  
'then he didn't enter it'

しかしながら、(21)の文は、会話の含意(conversational implicature)として、「過去において実現可能であった事象は、現在ではもはや不可能である」という語用論的意味を含む場合がある。

(23) qabla dhaalika, kaana yumkinu 'an našila 'ila  
before that Subj-arrive-we(=Sub) to  
hall-in  
solution-gen  
'Before that, it was possible for us to solve the problem' (サダト大統領の記者会見から)

同様のことは、kaana yastaṭii'uの場合も言えるが、その議論の前に少し未来時制の場合について考えてみたい。「sa~sawfa+yumkinuまたはyastaṭii'u」においては、条件依存的な未来の事象の生起可能性が表現される。例えば、(24)a、bの場合、yumkinuとyastaṭii'uの持つ基本的意味の相違はあるが、どちらも、もし現在予想可能な何らかの条件が（現在は整っていないが）整えば（例えば、cのような条件）、その事象の実現可能性があることを表現している。

(24)a. sawfa yumkinu 'an yazuura-ka ghad-an  
Subj-visit-he(=Sub)-you tomorrow-acc

'It will be possible for him to visit you tomorrow'

b. sawfa yastaṭii'u 'an yazuura-ka

'He will be able to visit you tomorrow'

c. 'If he is not busy/has got money/his father permits him/etc.'

「sa~sawfa+未完了形」が、未来の時点で成立する条件に基づく可能性の存在を問題にしているという点で（換言すれば、「可能性」のモーダルが未来時制の範囲 [= スコープ] 内にあるという点で）、yumkinuやyastaṭii'uを含む文が未来時に言及する場合と幾分異なる。後者においては、現時点では満たされている（或いは、必ず満たされることがわかっている）、問題の事象のための成立条件が、何か予測不可能な事柄によって成立を阻害されないという条件のもとに、問題の事象の生起可能性が存在することが意味される。

未来の出来事の場合は、その実現が条件付けられているため、その条件の現在に

おける有無と、実現の可能性しか問題にできないが、過去の出来事の場合は、可能性だけでなく、つまり可能であったかどうかだけではなく、実際に起こったかどうかについても問題になる。この点について二つの過去表現 *istaṭaa'a* と *kaana yastaṭii'u* を比較すると、次の実例にあるように、前者の *istaṭaa'a* は問題の事象が過去において実現されたことを含意するが、後者の *kaana yastaṭii'u* は必ずしも含意しない。

(25)a. *istaṭaa'a al-'imbaratuur 'an yaḥraqa al-ma'bad-a*  
           the-emperor(=Sub) Subj-set-to-fire the-temple-acc

'The emperor was able to (could and did) burn the temple'

b. *kaana yastaṭii'u al-'imbaratuur 'an yaḥraqa al-ma'bad-a*

'The emperor would (was in a position to) burn the temple'

このことは、「*kaana*+未完了形」が本来「過去における継続行為（つまり、過去の進行中の行為、或いは習慣的行為等）」を表わし、（動態動詞に限れば）一回性の行為を表わす「完了形」と対立していることから十分予想されることである。つまり、*kaana yastaṭii'u* は「能力を所有している」という継続性をより明確に示しているのである。従って、*kaana yumkinu* の場合と同様に、(26)b の *kaana yastaṭii'u* を含む文に続けて (22)a、b の両方の文を述べることができるが、*istaṭaa'a* を含む (26)a の場合は (22)a のみで、(27) のように (22)b を続けることができない。

(26)a. *istaṭaa'a 'an yadxula 'ila al-bayt-i*

'He was able to enter the room'

b. *kaana yastaṭii'u 'an yadxula 'ila al-bayt-i*

'He could enter the room'

(27) \**istaṭaa'a 'an yadxula 'ila al-bayt-i fa-lam yadxul-hu*

'He was able to (and did) enter the room, and he didn't enter it'

以上のことから予想されるように、*istaṭaa'a* を含む文は、多くの場合、作為者の能力に依存するかたちで実現した過去の事象に言及する。

(28) *istaṭaa'a Galileo 'an yanshura nazariiyat-a-hu*

Galileo(=Sub) make-known theory-acc-his

'Galileo was able to make his theory known (and he did actually)'

「能力」があっても、それを発揮しなければ、必ずしも問題の事象を実現させることはできないし、その事象が本来自然に自発的に生起しないものであれば、なおさらである。従って、「作為者の能力」を発揮して実現させたという能力表現においては、問題の能力の発現に際する作為者の意志の関与が、当然含意されることになる。例えば、(29) の文においては、普通の状態では燃えない本を、どうにかして燃やしたという状況が表わされている。

(29) istataa'a 'an yahraqa al-kitaab-a

'He was able to (or managed to) burn the book'

従って、(30)bのようなistataa'aを含まない文は、「作為者の意志」の不在を明示的に示す副詞をとることができるが（例えば、「タバコを本の上に置き忘れた」とかという状況等）、(30)aのような状況を想定することはできない。

(30)a. ?istataa'a 'an yahraqa al-kitaab-a bilaa qasḍ-in

without intention-gen

'He was able to (or managed to) burn the book without intention'

b. ḥaraqa al-kitaab-a bilaa qasḍ-in

'He burnt the book without intention'

(29)の場合は、「本を燃やす」という事象自体が、作為者の予想される能力の限界内で実現可能な事象であり、その意味で、問題の事象の実現化には、作為者の意志の有無（正確には、意志を持って行為が行なわれるかどうか）のみが含意されるが、事象自体が作為者の能力の限界を超えているとする前提が存在する場合は、その実現化が「反予想性」とでもいうべき含意を持つことになる。例えば、(31)の文においては、ザイドの商売の能力（才能）、或いは本の内容それ自体から（例えば、内容が悪いとか、ミス・プリント或いは乱丁が多いとか、商売上手な他の人が売れなかったとか等）判断して、売れる可能性のない（或いは低い）本を彼が売ることができたということで、当然発話者の予想外の気持ちが含まれることになる。

(31) istataa'a Zayd-un 'an yabii'a al-kitaab-a

Zayd-nom(=Sub) Subj-sell the-book-acc

'Zayd was able to sell the book'

このような反予想性を能力表現の語用論的意味と考える上で、問題となることが一つある。つまり、反予想性を明示的に示した(32)bだけでなく、ここでの推論からは矛盾するような(32)aも、(31)の文と接続可能であるということである。

(32)a. kamaa tawaqqa'naa

as Pf-expect-we(=Sub)

'as we (had) expected'

b. kamaa lam natawaqqa'

not Jus-expect-we(=Sub)

'as we didn't expect (hadn't expected)'

このようなistataa'aの持つ反予想性の含意と(32)a、bの接続可能性との間にみられる表面上の矛盾を解決するためには、(31)の文の意味構造と(32)a、bの接続詞kamaaの適用範囲との関係を考察しなければならない。まず、(31)は次のような少なくとも二つの基本的命題を含んでいると考えられる。

命題X：（過去において誰かが）本を売った。

命題Y：ザイドにはX（を成し遂げるため）の能力があった。

こう考えるとわかるように、(32)bが対象範囲とする部分は、命題Xの部分であり、命題Yの部分ではない。逆に(32)aがかかっているのは命題Yの部分だけだということである。つまり、istaṭaa'aを含む文が含意する「反予想性」は、作為者の能力の有無というよりはむしろ、問題の事象自体の実現可能性に関与するものと考えられる。

(33)a. istaṭaa'a Zayd-un 'an yabii'a al-kitaab-a, kamaa tawaqqa'naa  
'Zayd was able to (and did) sell the book, as we (had) expected'  
(him to have the ability to do so)'

b. istaṭaa'a Zayd-un 'an yabii'a al-kitaab-a, kamaa lam natawaqqa'  
'Zayd was able to (and did) sell the book, as we didn't (or  
hadn't) expected (it to be sold)'

以上、時制との関連でistaṭaa'aの持つ語用論的意味について考察してきたが、次に否定との関連でその「作為性」・「実現性」・「意志性」・「反予想性」という四つの語用論的意味がどのように扱われるか、簡単に考察したい。Lyons(1981, pp. 129-31)の指摘にまつまでもなく、特にモダリティと否定の関係については、真理値を問題とする（論理学的）意味論レベルの分析のみでは不十分であり、発話の前提等の語用論的情報の分析が不可欠である。例えば、(34)a、bは現象的（指示的）には(34)cと反対（従って、否定）の現象を指示している。

(34)a. その窓が開いていない。

b. その窓が閉まっている。

c. その窓が開いている。

しかしながら、「その窓が（何らかの理由でいつもその時間に）開いている」という状況を知っている発話者が、「閉まっている窓」を見ているような状況であれば、(34)aの方がより（語用論的に）適切であると思われる。つまり、否定の範囲の問題（つまり何が否定されるか）には語用論的情報が不可欠であり、実際の発話状況においては、Givon(1978)の言葉をかりれば、発話者によって「前提された情報(presupposed information)」のみが否定の範囲内に入ることになる。言い換えれば、準備条件としての発話者の知識（信念）が関与するのである。

モダリティと否定の範囲について言えば、意味論レベルでは二種類の否定が確認される。一つは、モダリティを範囲外とする内的否定(internal negation)であり（例、35a）、もう一つは、モダリティを否定する外的否定(external negation)である（例、35b）。

(35)a. yumkinu 'al-laa yabtasima

not Subj-smile-he(=Sub)

'It is possible for him not to smile'

b. laa yumkinu 'an yabtasima

not Subj-smile-he(=Sub)

'It is not possible (impossible) for him to smile'

istaṭaa'aに関して言えば、内的否定、外的否定の両方が可能である。

(36)a. yastaṭii'u 'al-laa yatakallama al-'arabiiyat-a

not Subj-speak-he(=Sub) the-Arabic-acc

'He is able not to speak Arabic'

b. laa yastaṭii'u 'an yatakallama al-'arabiiyat-a

not Subj-speak-he(=Sub) the-Arabic-acc

'He is not able to speak Arabic'

(36)aは、「アラビア語を話さない」という事象が（例えば、アラビア語を話せば自分の語学力の無さが相手に知られるというような状況で）発話者の能力内で可能であることを表わしており、(36)bは、単純に「アラビア語を話す」能力の不在を表わしている。ここで問題となるのは、先に述べたistaṭaa'aの四つの語用論的意味が否定の範囲内に入るかどうかということである。

まず、「作為性」つまり作為者の存在が否定されることはない。従って、作為者のない(37)aのyumkinu文をyastaṭii'uに置き換えることはできない。

(37)a. laa yumkinu 'an yanfaṣila al-ma'naa 'an

not Subj-be separated the-meaning(=Sub) from

al-shakli

the-form-gen

'Meaning can't be separated from the form'

b. \*laa yastaṭii'u 'an yanfaṣila al-ma'naa 'an al-shakl-i

'Meaning is not able to be separated from the form'

次に、他の三つの語用論的意味については、istaṭaa'aの否定形lam yastaṭi'の比較からわかるように、問題の事象が実現したかどうかという「実現性」のみが否定の範囲内に入ることができる。

(38)a. istaṭaa'a 'an yaḥraqa al-kitaab-a

Subj-burn-he(=Sub) the-book-acc

'He was able to (and did) burn the book (and he did so intentionally'

b. lam yastaṭi' 'an yaḥraqa al-kitaab-a



'He could not burn the book (though he intended to do so)'

c. lam yaḥraq al-kitaab-a

'He did not burn the book'

(38)b、cは共に実現しなかった過去の事象に言及しているが、(38)bの方は、意志的に作為者がなしたにもかかわらず、実現されなかった事象を表わしており、「意志性」が含意されている。従って、意志性を明示的に否定した文を(38)bに続けることは、不適切な文を生み出すことになる。

(39) ?lam yastaṭi' 'an yaḥraqa al-kitaab-a, wa lam yaqṣid 'an  
not Jus-intend to

yaḥraqa-hu

Subj-burn-it

'He was not able to burn the book, and he didn't intend to burn it'

従って、(38)bを形式的に表わせば、概略、次のようになる。

準備条件：発話の相手が、問題の過去の事象が作為者によって意志的に実現されたと信じていること。

誠実性条件：その事象が意志的になされたが、実現しなかったということを発話者が知っていること。

本質条件：準備条件内に含まれる発話相手の有する間違いを訂正すること。

最後に、疑問表現とyastaṭi'uの語用論的意味の関係であるが、「作為性」と「実現性」が疑問の範囲内に入るようである。例えば、(40)のYes-No疑問文においては、Xのような前提のもとに、YまたはZの命題内容が疑問の対象とされている（注6）。

(40) hal istaṭaa'a Zayd-un 'an yaquuda al-sayyaarat-a  
question marker Subj-drive the-car-acc

'Has Zayd been (or Was Zayd) able to drive the car?'

X：発話者（または他の誰か）が問題の事象の実現（可能性）を予想していない。

Y：ザイドに運転能力があったかどうか。

Z：ザイドが実際に運転したかどうか。

従って、Xのような前提が成立しがたいような状況、例えば、発話者自身に関する事象についての疑問文は（記憶喪失でその時のことを全く忘れてしまったような特殊な場合を除いて）、極めて不自然になる。

(41) hal istaṭaa'a 'an 'aquuda al-sayyaarat-a

'Have I been (or Were I) able to drive the car?'

以上、現代アラビア語のistaṭaa'a/yastaṭi'uの分析を通じて、能力表現の持つ

語用論的意味を考察してきたが、次の節では、日本語の能力表現においてこれらの語用論的意味がどのように関与しているか考察してみたい。

#### 4. 日本語の能力表現

##### 4. 1 統語的特性

日本語の能力表現は、まず動詞の形態的变化の観点から、語幹に-e-または-rare-がついたものと、動詞の基本形（連体形）に「～ことができる」がついたものがある（注7）。ここでは便宜的に前者の形式を「内的可能形」、後者の形式を「外的可能形」と呼ぶことにする。形態上、内的可能形の派生には強い制限があり、全ての動詞がこの形式を有するわけではない。寺村(1982, pp. 255-270)によれば、意志的動作を表わさない動詞は、この可能形をとることができない（例えば、（雨が）降る→\*降れる、ふさがる→\*ふさがれる（cf. 受動の意味では可能）、聞く→\*聞ける（cf. 他動詞の意味では可能）等）。このような形態論上の制限は、能力表現自体が有意志の作為者の存在を前提とするものである以上、意味論的にも予測可能な事柄である（cf. 寺村 ibid. p. 263、森田 1985, p. 35）。

次に能力表現における作為者の標示方法に注目するならば、作為者を助詞「に（は）」で標示する表現形式と、作為者を、主格を示す「が」（または「は」）で標示する表現形式がある。前者の場合、動作の対象となる（つまり、もとの文の目的語）名詞句は、助詞「が」によって標示されるのが普通である（注8）。従って、先に述べた動詞の形態上の区別と、作為者の標示方法による構文上の区別の二つの組合せによって、日本語の能力表現の典型的な構文として、少なくとも次のような四種類の表現が識別可能である。

①Aa文型：「Xに（は）+内的可能形」

②Ab文型：「Xが（～は）+内的可能形」

③Ba文型：「Xに（は）+外的可能形」

④Bb文型：「Xが（～は）+外的可能形」

例えば、(42)の基本文に対応する能力表現は各々(43)a～dとなる（注9）。

(42) 太郎はアラビア語を話す。

(43)a. 太郎にはアラビア語が話せる。（Aa文型）

b. 太郎はアラビア語を話せる。（Ab文型）

c. 太郎にはアラビア語を話すことができる。（Ba文型）

d. 太郎はアラビア語を話すことができる。（Bb文型）

以下においては、これらの四種類の文型の持つ（語用論的）意味について議論するが、その前に、自動詞／他動詞の対立の観点から、能力表現化における格標示の変化（「を」→「が」等）の問題について少しふれておきたい。

(44)a. この魚は木に登れる。(←登る)

b. この魚は食べられる。(←食べる)

寺村 (ibid. p. 259) は、(44)aのような自動詞から派生した「Xが(～は) + 自動詞の可能形」を「能動的可能表現(active potential)」、(44)bのような他動詞から派生した「Xが(～は) + 他動詞の可能形」を「受動的可能表現(passive potential)」と呼び、区別した。自動詞からの能動的可能表現については、問題なくAb文型に分類してよい(注9の議論を参照)。後者については、作為者が一般或いは不特定の人を指す場合と考えられ、Aa文型における「(不特定或いは全ての人)に(は)」の部分が省略されたものとみなせる。従って、この「は」は、(45)のような一般の性状規定や判断の文と同じ性質の「は」と考えられ、「を→が」変換の特殊な場合とみなせる。

(45) 氷は水に浮きます。

次に、この「が」(つまりAa文型の「が」)の統語的特性であるが、主語を表わす「が」というよりは、久野(1973, pp. 48-57)の議論にあるように、目的格を表わす「が」と考えられ、動詞の「～たい」形、「好き」等の内部感情を表わす形容詞や形容動詞、所有表現等に現れる「が」と同じ性質のものである。

(46)a. 僕は映画が見たい。

b. 太郎は花子が好きだ。

c. 太郎(に)はお金がある。

久野の言葉を借りれば(ibid. p. 51)、「状態を表わす他動詞、他形容動詞が目的語をマークする助詞として「が」をとる」と分析できる。能力表現の場合は、「～できる」→「～する能力の所有」と考えれば、継続的能力所有は一種の状態とみなせ、他動性(transitivity)の低い場合の目的語標示形式として「が」が選択されたものとも考えられる。

#### 4. 2 能力表現の意味

「に」によって標示される作為者が、問題の事象をしようと思えば実現させるだけの能力を所有しているという、継続的能力所有状態が表現されているという意味で、Aa文型を典型的な能力表現とみなすことに問題はないであろう。このことは、「～に～が」という形式面での所有表現との統語的平行性(注10)と、典型的他動詞構文に現われる「を」ではなく、「が」によって動作対象(正確には、作為者が問題の事象を実現させる上で最も関与的な事物)が標示されているということが示す低い他動性の二つの統語上の特性からも、十分推量できることである。しかしながら、(43)a～dを比べてもわかるように、「太郎にはアラビア語を話す能力がある(或いは、太郎はアラビア語を話す能力を所有している)」という知的意味におい

て、これらの諸表現間に差異は見られない。このことは、(43)a～dでは現在時制（または超時的時制）が使われており、問題の事象の実現が、可能性の程度としてしかとらえられないことに起因する。実際に実現したかどうかまで問題となる、過去の事象を表わす表現の場合は、(47)a、bの比較から判断できるように、Aa文型の方は、「実現性」について関与的でない。

(47)a. 太郎にはアラビア語が話せた。

b. 太郎がアラビア語を話せた。

(47)bの方は、実際に「太郎がアラビア語を話した」ことを含意することができるが、(47)aは必ずしも含意することができない。従って、(48)bは問題の事象の実現を含意しているのに対し、(48)aの方は何らかの証拠（この場合、実際に太郎が話しているのを見た場合でもよいし、誰かから太郎が話せることを聞いた場合でもよい）によって、太郎のアラビア語能力を確認したような意味しかない。

(48)a. 太郎はアラビア語を知らないと思っていたのだが、彼にはアラビア語が話せた。

b. 太郎はアラビア語を知らないと思っていたのだが、彼がアラビア語を話した。

また、継続的能力の存在（所有）のみを本来意味するAa文型は、次のような一過性の行為の実現を意味する脈絡においては、不自然である（注11）。

(49) あの夜、ジョンは酔っ払っており、おまけに一人だったので、

- a. ?太郎にはジョンが殺せた。
- b. 太郎はジョンを殺せた（実際に殺した）。

むしろ、(49)aの方には、殺そうと思えばいつでも殺せたが、実際には殺さなかったという含意がある。

また、次の実例においても強調されているのは、能力関係の存在であって、必ずしもその実現ではない。

(50) 事件後の二、三日、例によって私などには手に入れることのできないいくつかの材料が、ホームズの内部では少しずつ解決に向かって組み立てられつつあったのだろうが、はた目にはこの頃の彼は、暗中模索の状態以外には見えなかった。

そしてその間中、私にははっきりとそう言い切れるのだが、彼の頭からあのメアリー・リンキイが片時も離れなかったのは確かである。

（島田荘司『漱石と倫敦ミイラ殺人事件』）

それでは、次にAb文型の意味は何であろうか。確かに実現性という観点からは、Aa文型と異なっているが、Ba文型とは差異がないように思われる。

(51)a. 太郎にはその本が燃やせた。

- b. 太郎はその本を燃やせた。
- c. 太郎はその本を燃やすことができた。
- d. 太郎はその本を燃やした。

(51)aは、燃やそうと思えば、太郎の能力の範囲内で「燃やすこと」が可能であったという意味であり、その意味で逆に問題の事象の非実現性を含意する場合もある。その点、非実現性を明示した文と結合させると、(51)b、cとの間に異同が生じる。

- (52)a. 太郎には確かにその本が燃やせたが、燃やさなかった。
- b. ?太郎は確かにその本を燃やせたが、燃やさなかった。
- c. ?太郎は確かにその本を燃やすことができたが、燃やさなかった。

従って、実現性を否定した、(51)b、cの否定文を(51)aに結合させても、非文とはならない。

- (53) 太郎にはその本が燃やせたが、彼はそれを燃やせなかった。／・・・彼はそれを燃やすことができなかった。

もう一つ、(53)の文から観察されることは、Ab文型に含まれる「意志性」の含意である。つまり、(53)の前文が意味するのは、太郎にはその本を燃やそうと思えば燃やせる能力があったが、意志的にその能力を行使しなかったということである。すでに述べたように、本来、能力表現自体が、作為者が意志をもって行使すれば問題の事象を実現させられる能力を所有しているという意味を中核としているのであり、その意味で、問題の事象を実際に実現させたという表現には、作為者側の能力の意志的行使が自ずから含意されることになる。つまり、(51)bは問題の事象を意志的な能力の行為によって実現させたという意味であり、その意味で(54)aのような非意志的な事象の表現には不適切である(注12)。

- (54) 火の点いたタバコをその本の上に置き忘れたために、
  - a. ?太郎はその本を燃やせた。
  - b. 太郎はその本を燃やした／燃やしてしまった。
  - c. 太郎はその本を燃やすことができた。

しかしながら、(54)cが可能であるということからもわかるように(例えば、何度も燃やそうとしたが燃えなかったために寝てしまったが、偶然の失火、つまり意志的行為ではないが彼の能力内で行なわれた行為のために燃えてしまった)、Ba文型は実現性を含意できるが、必ずしも常に意志性を含意しない。

また、次のような、意志的に行なわれたが、実現しなかった事象を表現する場合は、実現性の部分のみが否定されるだけで、意志性の含意がより明確に示される。

- (55) 彼女はこの部屋にやって来た時、最後の手段に訴えるつもりでここに来ましたといった。しかしホームズは不幸にして彼女を救えなかった。その事

実が、彼の自尊心を深く傷つけていたのである。

(島田荘司 『漱石と倫敦ミイラ殺人事件』)

このように、Ab文型が否定文においても意志性を含意していることは、Aa文型の否定文と対照的である。例えば、(56)aに示されるように、Aa文型の否定文は基本的には作為者が問題の能力を所有していないこと(そしてそのために実現しなかった事象)を表わすが、(56)bのように、必ずしも問題の事象の非実現を含意するわけではないし、場合によっては、(56)cのように、能力はあったがその意志がなかったために実現しなかった事象が表現される。

(56)a. 太郎にはジョンが殺せなかった。

b. 腕力からみれば、太郎にはジョンが殺せなかったが、たまたま彼が酔っていたので殺せた。

c. 腕力からみれば、太郎にはジョンが殺せたが、ジョンの哀れな姿を見たために、太郎には彼が殺せなかった。

それでは、次にBab文型とAab文型の違い、つまり「～ことができる」が付加された場合の能力表現の意味は何であろうか(注13)。まず、Bb文型については、これまでの議論から必ずしも「意志性」を含意しないが、「実現性」は含意する場合もあることが判明した。例えば、(57)aは実現したことを意味しているが、(57)bは曖昧であり、(57)cは、問題の事象の実現ではなく、それを次にするための能力が備わったことを意味している。

(57)a. おかげで、有島がいかに重要な作家であつたかを知ることができた。

(司馬遼太郎『アメリカ素描』)

b. むろん、当時のロシアにも日本にも造船能力はあった。日本はすでに小型艦を国産でつくっていたが、ロシアの場合、技術の巧拙はともかく、  
どういう艦種でもつくることができた。 (同上)

c. 長城はこのあたりは二重になっていて、ひとつの拱門をくぐると、もう一つの櫓がまちかまえていて、楼上から矢がふりそそいできた。矢を狭い桁形のなかで逃げまわらねばならず、その桁形からのがれ得た者だけが、第二の拱門をくぐることができた。

(司馬遼太郎『韃靼疾風録』)

久野(1983, pp.150-156)は、内的可能形(彼の「レル・ラレル」形)と外的可能形(彼の「デキル」形)の意味の違いを考察しており(注14)、彼によれば、「動詞の可能形「レル・ラレル」は、主語の内的能力を表わし、「デキル」は、外的条件に由来する能力を表わす」(p.150)とされる。例えば、(58)aは太郎の内的能力を表現しており、(58)bは外的条件(例えば、医者に許可された等)によって可能となる場合を表現することになる。

(58)a. 太郎は酒が飲める。

b. 太郎は酒を飲むことができる。

しかし、(58)bは外的条件による可能のみを表わすのであろうか。次の例では、内的能力の読みも可能だと思われる。

(59) あなたは、太郎が外国語を全く知らないと言いましたが、本当のことを言う  
と、

a. 彼にはアラビア語が話せるんですよ。

b. 彼(に)はアラビア語を話すことができるんですよ。

また、内的可能形が必ずしも外的条件による可能を表わさないわけでもない。

(60) 昨日は給料日だったので、久しぶりにたつぷりと

a. 酒を飲めた。

b. 酒を飲むことができた。

しかし、次の例はどうであろうか。少なくとも(61)aはこのような外的条件によって可能となったことを表わすには、不適切である。

(61) 昨日は誰にも邪魔されず、久しぶりに一人で

a. ?太郎にはうまい酒が飲めた。

b. 太郎はうまい酒を飲めた。

c. 太郎はうまい酒を飲むことができた。

つまり、内的可能形の持つ内的能力の意味はその形式自体ではなく、Aa文型という構文にあると考えた方が妥当であろう。(61)bの場合は先の議論からもわかるように、もちろん「酒を飲む能力」を前提にはいるが、やっとのことで一人で酒を飲む機会を持てて、うまい酒を飲んだという意志的な事象の実現を表わす表現である。久野の議論の多くは、Aa文型とAb文型のこのような差異が考慮されていないために、幾分不適切な例文の対照分析がみられる。例えば、次のような「規則書きのシチュエーション」として挙げられた(62)a (cf. 久野の(19)a)の不適切さは、Ab文型の持つ意志性に由来すると思われる。

(62)a ?会員は、会費を年三回に分けて支払える。

b. 会員は、会費を年三回に分けて支払うことができる。

(62)aの場合、規則には明示されていないが、もしやろうと思えば会員の意志で支払えるという意味が強く、会員として所有できる権限の規則的簡条書きの記述としては不適切であろう。従って、(63)のようなAa文型に置き換えるとそれ程不適切とは考えられない(注15)。

(63) 会員には、会費が年三回に分けて支払える。

それでは、Bb文型の意味は何であろうか。(62)bに見られるような規則書きにおいて最も適切な表現であるということからもわかるように、Bb文型は、問題の事象

（の実現）と作為者の能力関係（つまり、作為者がその実現のための能力を所有しているという所有関係）を新しい情報として、提供する明示的な能力表現であると考えたい。従って、改めて新しい情報を提供することになれば、（実際に反対の予想が前提されているにせよ、全くの白紙状態であるにせよ）「反予想性」の含意がそこには提示されることになる。例えば、読者に対して未知の（そして、少なくとも読者にとっては新発見となる）能力関係についての情報を提供する学術論文の場合や、新しい製品の持つ性能を説明したりする使用説明書の場合等には、Bb文型が多用されている。

（64） 漢字についていえば、偏（へん）、旁（つくり）、冠（かんむり）などの形で単体字形を合体することにより、基本字形の数を適当な範囲内に制限することができる。（西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』）

（65） それぞれの機能は、単体で動作しますが、各機能で作成し、データフロッピーに登録したファイルを日本語ワープロで削除したり、複写したりすることができます。（ワードプロセッサ取り扱い説明書）

上例は、言わば能力関係の不在のみを前提して、その関係を明示的に確立しようとするものであり、その意味で反予想性の含意はあまり識別されないが、次例のように、問題の能力関係に関して否定的な予想を相手（読者）にさせるような状況が先に述べられ、次にその予想とは反対に問題の事象が実現可能であったことを述べるような場合は、Bb文型が最も適切である。

（66） かれの時代、敵である他の王国では、王さまがその財産・収入で傭いうる範囲でしか兵を傭えなかった。自然、軍隊の数は少なかった。ところが、ナポレオンという、革命軍の最高者は「義務」でかりだされてくる国民に、国民の税金で買った兵器をもたせ、軍服を着せるという自動操作によって大軍をととのえることができた。

（司馬遼太郎『アメリカ素描』）

また、次の例でも、予想外（或いは、望外）のことが偶然できたという意味で一過性の能力関係の実現が表現されている。

（67） 中垣博士は東京に健在ということがわかったので、日本にやってきたところ、その年の春に亡くなったと知らされた。それでも、おなじ薬物学を研究している中垣の息子に会うことができた。

（陳舜臣『クリコフの思い出』）

また、次例のような新たな予想外の能力について報告する場合にも多用される。

（68） 太郎にはアラビア語が話せますが、驚くべきことに彼は、あの文字を書くこともできます。

久野の「外的条件に由来する能力」というBb文型についての意味は、ある特定の



外的条件が整えば問題の事象が実現可能である（または、整ったので実現可能となった）ということを表現する場合と解され、Bb文型の持つ基本的意味というより、その派生的意味と考えられる。例えば、次例のように、関与的な外的条件が明示された文脈においては、その条件が満足されることによって生まれる新たな能力関係（の可能性）が提示されている。

- (69) しかし、夢のような飛躍だが、はるかに長征して長江まで併合すれば天下を食わせることができ、金が果たしえなかった全土征服という夢が実現するかもしれない。（司馬遼太郎『韃靼疾風録』）

(70)の例では、そのような明示的条件の部分がないが、作為者である「太郎」と「散歩に出かける」という事象との間の能力関係に関する日常的推論から（つまり普通の人であれば、通常「散歩に出かける」という内的能力は、当然持っているはずだという推論）、外的条件に由来する能力の読みが（例えば、妻の許しが出たとか、締切のせまった原稿が出来上がった等）、比較的自然的に選択される傾向があるだけであって、必ずしも内的能力の読みが不可能というわけではない。

- (70) 太郎は、久しぶりで散歩に出かけることができた。

「反予想性」の含意を持ち得る新しい能力関係の提示という、ここでのBb文型についての定義から、久野の挙げた(71)b (cf. 彼の(25)b)の不自然さが説明できる。

- (71)a. 僕はフランス語の新聞が読める。

- b. 僕はフランス語の新聞を読むことができる。

つまり、自分の持っている（従って、少なくとも自分には既知である）能力関係を新たな情報として提示することは、特殊な条件下（例えば、語学力のなさのために新聞などとても読めないと思っていた場合とか、相手が問題の能力関係について無知、或いは不審の念を持つ場合）以外は、当然不自然になる。また、(72)b (cf. 久野の(27))の不自然さについても、同様の説明が可能である。普通の疑問文である(72)aは、発話者にとって未知の情報である問題の能力関係の有無を尋ねているわけだが、(72)bは同じ主旨の疑問文としては不自然に聞こえる。それは、発話者が既に知っている情報（或いは知り得る情報）をもとに、問題の能力関係の不在が予想されるという状況が(72)bには前提とされるからであり、従って、(72)cのような文脈では自然な表現となる。

- (72)（聞き手にフランス語の新聞を渡しながら）

- a. 君はフランス語の新聞が読めますか。
- b. 君はフランス語の新聞を読むことができますか。
- c. 君のフランス語の力は、たいしたことがないといううわさなんだが、君（に）は、本当にこんなむずかしいフランス語の新聞を読むことができますか。

Ab文型の「意志性」は否定文において否定の範囲に入ることがなかったが、Bb文型の「反予想性」の場合はどうであろうか。次の例を観察してみよう。

- (73) ジョンソンのスタートは独特だ。ピストルが鳴ってから、スターティング・ブロックを蹴って走り出す時間は0.一二九秒。ルイスと比べたら0.六七秒も速い（昨年の世界選手権）。今回の百メートル決勝でも、スタートと同時に飛び出し、ルイスはその差をついにつめることができなかった。（週間『AERA』）

ここで否定されていることは、まず実現性であり、実際に「ルイスがその差をつめなかった」ことを含意する。反予想性については、読者に新しく確認された問題の能力の不在の情報を提供しているという意味で（従って、反予想性の含意自体は弱い）、アラビア語の場合と同様に否定の範囲外にあると判断される。

以上の議論から、その反予想性が強い場合と弱い場合があるが、Bb文型は反予想性を含意することがわかった。それでは、Ba文型の場合はどうであろうか。Ba文型は他の三つの文型に比べて頻度がかなり低いので、実例から十分にその意味を抽出しがたいのであるが、AaとAbの両文型の対立から類推して、Ba文型は、継続的能力の所有の意味が、Bb文型より強く前面に出された文型と判断される（注16）。例えば、(74)aは(74)bと比べると、実現性の含意が必ずしもなく、(74)cのような表現が可能である。

- (74)a. 太郎にはその本を買うことができた。  
b. 太郎はその本を買うことができた。  
c. お母さんからお金をもらっていたので、太郎にはその本を買うことができたが、立ち読みをすればいいと思ったので、買わなかった。

また、次の実例では、能力の不在（従って、問題の事象の非実現）の意味に加えて、外的可能形自体が持つ反予想性の含意も読み取れる。

- (75) 「おやおやナツミさん、あなたまでがそんなことをおっしゃっていただいては困りますね。ワトスン君やレストレイド君にこの場面を理解することができないにしても、あなただけは僕のやり方に賛成して正しさを証明して下さると思っていたのに」

（島田荘司『漱石と倫敦ミイラ殺人事件』）

## 5. まとめ

以上のような考察から、少なくとも日本語とアラビア語の能力表現においては、「作為性」・「実現性」・「意志性」・「反予想性」という語用論的意味が含まれることが確認された。能力表現が、作為者に問題の事象の実現可能性を統御する能力があるという両者間の能力関係に言及するものである以上、その実現化において

は、当然作為者の存在、つまり「作為性」と、その意志による能力の行使、つまり「意志性」が含意されることになる。また、能力関係が新しい情報としての性格を持つものであれば、当然そこには「反予想性」の含意が発現することになる。

アラビア語においては、過去における「実現性」についてのみ、形式上の区別がなされるが(cf. *istaṭaa'a* vs. *kaana yastaṭii'u*)、一方、日本語においては、作為者の標示方法(cf. 「～に(は)」 vs. 「～が(～は)」)と動詞の可能形式(cf. 内的可能形「～れる、～られる」 vs. 外的可能形「～ことができる」)の組み合わせによって表現される四種類の基本的文型が、形式上の区別として各々の語用論的意味を持つことがわかった。これらの語用論的意味は、発話の場において発話者が前提とする(発話者とその発話の相手が所有する)知識が反映されたものであり、日本語においては、それらの情報がより明確な形で言語化され、談話構造がアラビア語に比べて発話の関与者の持つ知識という言語場の制約を強く受けていると言える(注17)。

#### 注

(注 1) アラブ世界では、社会言語学的にみた 'diglossia' の状況が一般的であり、単純に言えば、社会的威信の高い文語的アラビア語 (*al-fuṣḥaa*) と低い口語的アラビア語 (*al-'ammiya*) の二変種が識別できる。後者は、一般にアラビア語方言として記述されるものであり、実際の言語使用では、前者との干渉の程度によって、いくつかの社会言語学的変種が識別されるが、以下の議論においては両者の相互干渉による変異については考察の対象外とする。尚、方言の成立過程の問題については、西尾(1986)を参照。

また、本稿でのアラビア文字の転写は原則として池田(1976)に従うが、長母音は母音を重ねることで示した。略号は以下の通りである。Pf=Perfective, Impf=Imperfective, Subj=Subjunctive, Jus=Jussive, Impr=Imperative, nom=nominative, acc=accusative, gen=genitive.

(注 2) 本稿ではアラビア語或いはアラビア語文の訳として英語を用いるが、これは便宜的なものであって、各々の訳が必ずしも英訳と全くの等価ではないことに留意する必要がある。例えば、以下、*yumkinu* には 'can' を、*yastaṭii'u* には 'be able to' の訳語をあてるが、両者は必ずしも同じ使われ方をするものではない。また、以下のアラビア語の実例の多くは、Zayed(1984)からのものであるが、煩雑さを避けるため引用文献を付記しない。

(注 3) 辞詞的モーダル形式の統語的特性については、西尾(1989a)参照。また、'ala は *yajibu* の省略形とも考えられるが、ここでは辞詞的モーダル形式に分類しておく。

(注 4) 動名詞をとる場合のistataa'aは、本稿では扱わない。また、以下の日本語の議論においても同様に、「～できる」が連用形転成名詞を取る場合(例えば、泳ぐ→泳ぎができる)については、考察の対象外とする。

(注 5) 以下の分類は便宜的なものであって、当然、二つ以上の特徴を持つ研究もあるが、当該研究が前提とする考え方、大まかな傾向として考えていただきたい。

(注 6) Wh疑問文の場合は、モダリティと関連のある部分(つまり、作為性、実現性等)が疑問の範囲に入ることはなく、他の部分が範囲に入るだけである。例えば、次の例では、YとZの命題の真理を前提として、その関連する時間についての質問をしたものである。

例: imtaa istataa'a Zayd-un 'an yaquuda al-sayyaarat-a  
'Where was Zayd able to drive the car?'

(注 7) 従来の日本語学(国語学)では、同表現を「可能表現」(或いは「可能文」)と呼んだり、寺村(1982)のように態(voice)の一種とみなし「可能態」と呼んでいるが、本稿では作為者の能力には本来非関与的な「可能性(possibility)」を表わす表現との混同を避けるために、「能力表現」と呼ぶことにする。また、「～できる」自体は「～する」の補充的(suppletive)可能形として用いられるが(例: 練習する→練習できる)、この場合の「～できる」は内的可能形の一種とみなせる。ただし、本稿においては、類似の「～できる」形が次例のように語幹の名詞(或いは、語幹が名詞化されたもの)と助詞等をはさんで間接的に結合された表現(cf. b, c)は、考察の対象外とする。

- a. ピアノを練習できる。(←練習する)
- b. ピアノの練習ができる。
- c. 読み書きができる。(←読める、書ける)

(注 8) 「を→が」変換における統語上の制限についての詳しい議論は、寺村(1982)を参照。この現象に関連して問題となるのは、一見するとAa文型とAb文型の中間文型とでも言うべき次例のような表現である。

- a. 太郎はアラビア語が話せる。

井上(1976, p. 99)は、作為者を「に」で標示する規則と「を→が」変換の規則を任意的規則とみなし、例文aと「太郎はアラビア語を話せる」の間に有意義な差を認めていない。寺村(ibid.)は、同様に作為者の標示する形式が任意に交代可能であるとし、「が(～は)」になれば「を」をとることが多く、特に次例のように作為者と可能形式間がはなれるほどこの傾向が強いとする。

- b. 君がフランス語を辞書なしでそんなにすらすらと読めるとは知らなかった。(寺村の例文(21) p. 258)

実際、例文cの不自然さから、「を→が」変換と作為者の標示形式との間に有意義な相関関係があるとわかるが（ただし、例の数は極めて少ないが、「を→が」変換が起こらない場合がある。例：紂王に西伯を殺せるものか。陳舜臣『ものがたり史記』）、本稿では例文aのような表現は主題化等による複合形「には」の「に」が（任意に）省略されたものと考え、Aa文型の一種とみなしたい。

c. ??太郎にはアラビア語を話せる。

（注 9） 自動詞の場合は、「に（は）→は（～が）」の交代が起こりやすく、実際の例においても、これらのAab、Babの四つの文型が明示されることが少ない。しかしながら、井上(ibid.)が述べたように、「自動詞文が補文になっている時に「に」があらわれない」(p.104)ということでは、必ずしもない。

a. ジョンが泳げない。

b. \*ジョンに泳げない。（井上の(27)b p.104）

例文bは一見不自然だが、次の文脈では自然である。

c. 私が泳げなかったのだから、ジョンにも泳げないでしょう。

つまり、ジョンの持つ固有の能力の有無のみを問題とする文脈では、bよりもaが好まれるが、水泳能力が有ることを前提として、その能力の程度が問題となった場合は（例えば、この川を泳いでわたれるか、10,000m泳げるか等）、「に」の使用が不自然でなくなる。自動詞の場合については、本稿では詳しく扱わないが、一応例文aの「が（～は）」は、Aa文型の「が」（←「を」）とAb文型の「が（～は）」の両者が中和された形式とみなしたい。

（注 10） 所有表現との関連性、目的格を「が」で標示する他の構文との関連性については、久野(1973, pp.48-57)を参照。

（注 11） 不自然であるというのは、(49)aが非実現を含意しているということではなく、実現性に対して非関与的であるということである。つまり、(49)aから聞き手（或いは読者）は、問題の事象が実際に実現したのか、しなかったのか判断することはできない。

a. あの夜、ジョンは酔っ払っており、おまけに一人だったので、太郎には  
ジョンが殺せた { が、殺さなかった。  
                              { ので、殺してしまった。

このことは、否定文にすると、さらに明確になる。

b. 太郎には確かにジョンが殺せなかったが、 { 卑怯な手段で殺した。  
  { あきらめて、帰った。  
c. 太郎は確かにジョンを殺せなかったが、 { ?卑怯な手段で殺した。  
  { あきらめて、帰った。

（注 12） ただし、日頃から燃やそうと思っていたが、他人にみられると困る

のでなかなかその機会がないまましていると、偶然の失火でその本が燃えてしまったという状況であれば、間接的に彼の意志（意図）が達成されたという意味で(54)aの文は可能であろう。また、内的可能形の持つ「意志性」が関与する場合として、主として物に生じる変化を表わす自動詞が、人間を動作主体とする意志的な動作を表わす場合についても、同様に能力表現の語用論的意味の観点から説明可能である（cf. 西尾寅弥 1988 p.188）。

（注 13） 柴谷(1978, pp.146-149)は、内的可能形と外的可能形に同一の深層構造を与え、後者の「できる」が補充形として置き換わるという分析の可能性を述べている。

- a. 太郎は歩ける。← [太郎は [太郎が歩く] (ら) れる]
- b. 太郎は出席できる。← [太郎は [太郎が出席する] (ら) れる]
- c. 太郎は歩くことができる。← [太郎は [太郎が歩く (という) ことをする] (ら) れる]

b, cは、「する+ (ら) れる→しられる」となり、「しられ」が補充形「でき」に置き換えられる。さらにcの場合は、助詞が「を→が」と調整される。しかしながら、柴谷の議論にあるように(p.148)、bの補充形についてはこの分析が妥当であるとしても、cつまりBab文型については意味論的観点からも別個の構造を想定した方がいいと思われる。また、「～ことができる」の「が」については、Aa文型中の「が」（←「を」）と同性質のものと考えたい（ただし、この場合、「を」をとる文は非文法的となる。cf. \*太郎は歩くことをできる）。

（注 14） ただし、久野の議論では、以下の議論にみられるように、作為者の標示方法によるAab文型とBab文型の区別をしていない。

（注 15） 久野(ibid. p.154)は、(62)aがセールスマンが会員加入をすすめる時に用いる文(cf. a)と考えれば適格文となるとして、その理由として、聞き手の立場に立って、聞き手が外的条件に由来する能力を内的能力視化するプロセスを代行して作った文となるからであるとする。

a. 会員は会費を年三回に分けてお支払いになれます。(久野の(21)b p.154)

しかしながら、aの文はもし契約すれば、あなたを含めた会員は（つまりあなたは）、その（内的）能力（または権利）内であなたの意志次第でこんなことも実際にできますよという意味であり、その「意志性」と「実現性」の含意から聞き手に実際に会員になって自分の意志でその権限を行使しているところを想起させ、話に乗ってこさせる効果を持つ表現と解釈される。

（注 16） すでに指摘したように、「～ことができる」の「が」は、Aa文型の「が」と同性質のものと考えられ（cf. 注13を参照）、Ba文型においてもAa文型と同様に、作為者標示形式の中和が起こると推定される（cf. 注8を参照）。

- a. 太郎には〔その本を買うことが〕できた。(Ba文型)
- b. 太郎(に)は〔その本が〕買えた。(Aa文型)
- c. 太郎はその本を〔買うことができた〕。(Bb文型)
- d. 太郎はその本を〔買えた〕。(Ab文型)
- e. \*太郎はその本が買うことができた。

eの非文法性からもわかるように、〔その本を買うこと〕の部分は、可能形式の主語とはならない(つまり「を→が」変換が不可能な)目的語を含む補文と考えられ、統語的には、補文の有無はあるが、aつまりBa文型はbつまりAa文型と平行関係にあり、cつまりBb文型はdつまりAb文型と平行関係にあると言えよう。

(注 17) 日本語の能力表現については、他のモーダル形式との関連性、統語上の問題(「を→が」変換、「に」の省略、自動詞における標示形式の問題等)、否定・疑問との関係、知覚動詞(見る、聞く等の能力表現)等の残された問題があるが、別稿にゆずりたい。また、英語の‘can’と‘be able to’の関係についても、同様のアプローチが可能かと思われるが、その問題についても、別に詳論したい。

#### 参考文献

- 池田修(1976)『アラビア語入門』 東京:岩波書店。
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語・上』 東京:大修館書店。
- 久野暉(1973)『日本文法研究』 東京:大修館書店。
- \_\_\_\_\_(1983)『新日本文法研究』 東京:大修館書店。
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』 東京:大修館書店。
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 東京:くろしお出版。
- 西尾哲夫(1986)“On the pronominal suffixes in Proto-Colloquial-Arabic.”  
『言語学研究』第5号, 1-24.
- \_\_\_\_\_(1989a)(印刷中)“On the modal function of the Arabic particle  
qad: A contribution to the typology of modality.” 『アジアの諸言語と  
一般言語学』(西田龍雄教授還暦記念論文集) 東京:三省堂書店。
- \_\_\_\_\_(1989b)“On the non-causative usage of the causative form in  
Arabic.” 『日本中東学会年報』第4号。
- 西尾寅弥(1988)『現代語彙の研究』 東京:明治書院。
- 森田良行(1985)『誤用文の分析と研究 ―日本語学への提言―』 東京:明治書院。
- Acker, M. V. (1981) “Must and have to: a dynamic perspective.” Antwerp  
Papers in Linguistics 22.
- Bouma, L. (1975) “On contrasting the semantics of the modal auxiliaries of

- German and English." Lingua 37, 313-39.
- Boyd, J. and J.P. Thorne (1969) "The semantics of modal verbs." Journal of Linguistics 5, 57-74.
- Coates, J. (1983) The semantics of the modal auxiliaries. London-Canberra: Croom Helm.
- Comrie, B. (1976) Aspect. Cambridge:Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (1985) Tense. Cambridge:Cambridge University Press.
- Diver, W. (1964) "The modal system of the English verb." Word 20, 322-52.
- Ehrman, M. (1966) The meaning of the modals in present-day American English. The Hague:Mouton.
- Givon, T. (1978) "Negation in language: pragmatics, function and ontology." Syntax and Semantics, vol.9: Pragmatics (Cole, P. ed.), New York:Academic Press.
- Johannesson, N. (1976) The English modal auxiliaries: a stratificational account. Stockholm:Almqvist & Wilkson.
- Joos, M. (1964) The English verb: form and meanings. Madison and Milwaukee, Wisc.:The University of Wisconsin Press.
- Karttunen, L. (1972) "Possible and MUST." Syntax and Semantics, vol.1 (Kimball, J. ed.), New York:Seminar Press.
- Kratzer, A. (1977) "What 'must' and 'can' must and can do?" Linguistics and Philosophy 1, 337-55.
- Lakoff, R. (1972) "The pragmatics of modality." Chicago Linguistic Society 8, 229-46.
- Lyons, J. (1977) Semantics. vol.2. Cambridge:Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (1981) Language, meaning and contexts. London:Fontana.
- MacCallum-Bayliss, H. (1984) The modal verbs: univocal lexical items. Ph.D. dissertation, Georgetown University.
- Marino, M. (1973) "A feature analysis of the English modals." Lingua 32, 309-23.
- Newmeyer, F. (1973) English aspectual verbs. The Hague-Paris:Mouton.
- Ney, J.W. (1981) Semantic structures for the syntax of complements and auxiliaries in English. The Hague-Paris:Mouton.
- Palmer, F.R. (1979) Modality and the English modals. London:Longman.
- \_\_\_\_\_ (1980) "Can, will and actuality." Studies in English Linguistics for Randolph Quirk (Greenbaum, S. et al. eds.) London:Longman.



- \_\_\_\_\_ (1986) Mood and modality. Cambridge:Cambridge University Press.
- Searle, J. (1983) Intentionality. Cambridge:Cambridge University Press.
- Tregidgo, P.S. (1982) "Must and may: demand and permission." Lingua 56, 75-92.
- Twaddell, W.F. (1960) The English verb auxiliaries. Providence:Brown University Press.
- von Wright, E.H. (1951) An essay in modal logic. Amsterdam:North Holland.
- Woisetschlaeger, E. (1976) A semantic theory of the English auxiliary system. Indiana University Linguistics Club.
- Zayed, S.H. (1984) A pragmatic approach to modality and the modals: with application to literary Arabic. Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.

(にしお てつお, 文学部研修員・工学部非常勤講師)